つくば市における民家(農家)の編年

A STUDY ON THE FOLK HOUSES IN TSUKUBA CITY IN A CHRONOLOGICAL FORM

黒坂 貴裕^{*1}, 安藤 邦廣^{*2}, 後藤 治^{*3}, 藤川 昌樹^{*4}, 堀江 亨^{*5}, 中野 茂夫^{*6}
Takahiro KUROSAKA, Kunihiro ANDO, Osamu GOTO,
Masaki FUJIKAWA, Tooru HORIE and Shigeo NAKANO

This paper has done a chronological study according to the folk houses investigation of Tsukuba City. The purpose of this study is to clarify the date of every classification and the regional characteristics in Ibaraki Prefecture. As a result, the following facts were cleared; 1) In classification I-a, the building type is similar to the original form of whole Ibaraki Prefecture. 2) In classification I-b, regional characteristics belong to the wide area such as south and west parts of Ibaraki. 3) In Classification II-a, the building type begins to show the independent regional characteristics of the western part.

Keywords : *Folk house, Chronological Study, Regional Characteristics, Ibaraki, Tsukuba City*
 民家, 編年, 地域性, 茨城, つくば市

1. はじめに

本稿は平成10年～13年につくば市教育委員会の委託により実施された、つくば市古民家調査の結果をまとめたものである。この調査では町家6棟、農家57棟、計63棟を調べたが、建築年代について棟札、墨書、文書などが残り、明らかであるものは18棟に止まった¹⁾。特に農家で、年代が遡ると推定される民家に史料は少なかった。そこで本稿では、町家を除いて農家住宅に対象を絞り、形式・特徴について編年を行う。

つくば市における過去の民家調査は、①「茨城県の民家」²⁾としてまとめられた緊急民家調査、②「近世町家の実態調査(筑波の場合)」³⁾、③桜民家園開設にあたり行われた旧横田家解体調査⁴⁾、が挙げられる。この中で、本稿の対象である農家について、体系的に論じられているのが①である。今回の筆者らの調査では、①に採り上げられた民家の内、4棟を再調査した⁵⁾。その結果から、調査の詳細さは各民家毎に異なっていること、地域民家研究として体系化するには調査の質量ともに不足していることが考えられた。

以上から、対象地域を狭め、調査の質量を増やして編年を行うことは、周辺地域の民家研究においても基準を与え、体系化への足掛かりとなる。そこで、本稿では編年の結果を県内の文化財指定民家

と比較し、あらためて茨城県内の民家体系を意識しながらつくば市の民家について考察を試みた。

なお、各戸の解説や図面などは説明に必要なものに留めたので、その他全体の図面・解説についてはこの調査の報告書である「つくばの民家」¹⁾を参照されたい。

2. 調査と市内民家の概要

調査の概要 調査はまず予備調査を行い、調査対象として民家の概況を把握し、本調査を行う民家を選定した。

まず本調査は、平面図・配置図・住人の聞き取りを採取した。また、目に付いた痕跡を記録している。詳細な調査が可能であった家では2次調査を行い、断面図・痕跡図などを採取し、復原作業を行った。したがって、1次調査にとどまった民家については細部について不明な点が多い。編年表(表1)の空白部分は指標について確認できなかったと理解されたい。

間取り 整形・食い違いの問題を別にすると、市内の民家は現状では殆どが、表側と裏側に部屋を区別した居室部2列の四間取りや同3列の六間取りである。また、梁間(奥行き)を3つに分割して部屋とする奥深い間取りの民家もある。現状ではこのようであるが、

^{*1} 筑波大学大学院芸術学研究科 博士課程・デ修

^{*2} 筑波大学芸術学系 教授・工博

^{*3} 工学院大学工学部建築都市デザイン学科
助教授・博士(工学)

^{*4} 筑波大学社会学系 助教授・博士(工学)

^{*5} 日本大学生物資源科学部森林資源学科 助教授・博士(工学)

^{*6} 筑波大学大学院社会学系研究科
博士特別研究員・博士(都市・地域計画)

Graduate Student, Doctoral Program in Art and Design, University of Tsukuba, M. Des.

Prof., Inst. of Art and Design, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Design in Archit. and Urbanism Faculty of Eng., Kougakuin Univ., Dr. Eng.

Assoc. Prof., Inst. of Policy and Planning Sciences, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Forest Sci. and Resources, College of Bioresource Sci., Nihon Univ., Dr. Eng.

Researcher in Policy and Planning Sciences, Univ. of Tsukuba, Ph. D. in Urban and Regional Planning

表1 調査民家燬年表

※1 調査 No.	規模間数 桁行 × 梁間	広間 分	納戸 欄	土間/広間 土間独立柱 (オカマ柱)	※2 土間 独立柱 (オカマ柱)	※3 セガイ イ	化粧 垂木	格子 子	三本 引	※4 座敷 中柱	座敷 中柱	座敷 中柱	※5 燬年 代
I-a	17	6.0 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	42	7.0 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	27	7.0 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
I-b	5	6.5 × 3.5	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	54	7.0 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	36	7.0 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	10	6.5 × 4.0	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	35	7.0 × 4.5	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	9	7.5 × 3.5	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
	28	9.5 × 3.5	×	○	×	○	○	○	○	○	○	×	
II-a	34	9.0 × 6.0	○?	○x2	×	○	○	○	○	○	○	×	
	22	7.0 × 5.0	○?	○x2	×	○	○	○	○	○	○	×	
II-b	13	8.5 × 5.0	○?	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
	29	10.0 × 4.0	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
	24	7.5 × 4.0	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	安永5年, 1776
	23	7.0 × 5.0	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
	33	7.0 × 4.0	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
	37	10.0 × 5.0	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
	43	7.0 × 4.5	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	
III	58	7.5 × 5.5	○?	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	55	10.0 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	61	10.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	12	11.5 × 5.5	○	○	○?	○	○	○	○	○	○	×	
	57	8.5 × 4.5	○	○	○	×	?	?	?	○	○	×	
	11	12.0 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	文政5年, 1822
	7	12.0 × 5.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	文政10年, 1827
	6	10.5 × 4.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	59	10.5 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	天保13年, 1842
	19	12.5 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	39	7.0 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	45	7.5 × 5.0	○	△	○	○	○	○	○	○	○	×	
	0	7.5 × 5.0	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	(寛政12年頃, 1800)
	56	7.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	15	10.0 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	25	9.5 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	47	9.5 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	(天保8年, 1837)
	63	11.0 × 6.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	(天保8年頃, 1837)
	21	12.0 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	38	10.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	安政4年, 1857
	18	11.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	49	8.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	53	7.5 × 5.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	(文久年間(1861~64))
IV	30	8.0 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	元治2年, 1865
	52	8.0 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	慶応2年, 1866
	20	12.5 × 6.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	慶応2年, 1866
	32	7.5 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	慶応3年, 1867
	50	9.0 × 5.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	(幕末~明治初期)
	62	8.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	31	10.0 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	26	9.5 × 3.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	46	9.5 × 6.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治9年, 1885
	44	7.0 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治10年, 1886
	41	6.5 × 4.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	40	6.5 × 4.0	○	?	○	○	○	○	○	○	○	×	(明治後半)
	60	7.5 × 5.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治24年, 1891
	48	7.5 × 5.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治26年, 1893
	51	6.5 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治32年, 1899
	8	9.0 × 4.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	明治36年, 1903

※1:「調査No.」の網掛けは一次調査にとどまったもの。No.は『つくばの民家』での通し番号。

※2:土間独立柱の○は表にも有るもの。

※3:「○○」は場所を変えて使い分けるもの。「◎」はセガイ+化粧垂木の軒。

※4:「座敷」の◎は柱間が壁・窓に復されるもの。

※5:ゴシックの括弧付きは信頼性のある根拠が有るもの。明朝の括弧付きは伝承。各根拠は報告書参照。

図1 区分I (No.17)

図2 区分II-a (No.34)

図3 区分II-b (No.29)

図4 区分II-b (No.24)

図5 区分III (No.57)

図6 区分IV (No.46)

復原作業を行うと広間型にあたる民家を確認できた。

各部屋の呼称と位置については、復原図(図1-5)を例として挙げておくが、一般的には下手の表が広間、裏が茶の間(勝手)、上手の表が座敷、裏が納戸である。この名称を以下で使用する。

構造 間取りとも関係するが、この地域の民家で最も特徴的と考えられるのが、オカマ柱の存在であろう。オカマ柱の存在は茨城県内で、つくば市以外でも散見でき、これまで以下のように説明されている。①台所の中心の柱。オカマサマを祀る⁶⁾。②主屋の土間奥にあるかまど付近に立つ独立柱を指す呼称⁷⁾。以上の説明はこの地域のオカマ柱にも該当する。またこの地域では、カマ柱、カマド柱、カマ大黒とも呼ばれ、一般には他の柱よりも太い(図1-5の柱A)。しかし、土間の妻側柱である場合もあるため(図3の柱A)、必ずしも独立柱にはならない。本稿ではオカマ柱の内、建築的に特徴有ると考えられる、土間奥側(かまど付近)の独立柱であるオカマ柱に着目して分析している。間取り的には、通常茶の間(勝手)が土間に突出する場合、この柱まで床が張られる。いずれにしても、このような独立柱を持つ民家が調査例の約半数近くまで見られる。また、図6の柱Bのような柱も見られるが、一般に小黒柱と呼ばれ、桁行方向で大黒柱と同じ筋に立ち、大黒柱と結びつきが強く、オカマ柱とは異なる特徴を持つ。

地域性 編年分析を行う際の注意点⁸⁾として、なるべく地域差が少ないグループを選ぶ必要がある。大岡⁹⁾は藩領域によって成立する民家、その発展過程が異なることを明らかにしている。また、自然的条件によって成立した民家が異なることも一般的によく説明されている。したがって、編年作業においては地域差に留意し、差が少ないグループによって分析しなくてはならない。

ここで、つくば市で藩領域について見ることにする。齋藤¹⁰⁾によれば、まず寛文(1661～73)期の領有状況は、1万石以下の諸藩領、旗本領、寺社領と細かく分かれていた。その後、元禄10年に大規模な領地替えが行われ、そのまま明治まで固定された。幕末期(明治維新時)の領有状況は表2¹¹⁾の通りである。この中で、土浦藩は9.5万石の一部であり、市内最大の藩であるが、それでも細分化されていることが分かる。また、市内は地理的には北側の市町村境界に筑波山が位置するものの、全体的に平坦地である。

したがって、前述の領有状況と地理状況を踏まえて市内民家を見れば、地域性については編年指標に大きな影響がないと判断した。

階層性 階層差も編年分析には重要である。聞き取り調査において、名主、地代官、組頭などの階層性に関わる由緒を聞くことができた家もあった。しかし、史料など裏付けを欠く家も多く、必ずしも建設年代の頃の階層を示すとは考えにくかった。また、特に建築年代の遡る民家では、階層性を示す伝承を聞くことができなかった

家が多い。したがって、編年分析を行う上で、指標として取り上げることが難しかった。そこでこの点については編年分析の結果から考察するものとして、今後の課題とした。

3. 編年の指標

編年の指標については、全国的に一般的なもの⁸⁾と、この地域の民家に見られる特徴を、照らし合わせて選択した。また、それ以外の指標については、全国的な指標による編年の結果をもとに、ある特徴の有無について年代序列を判断した指標、改造過程を追求することにより得た指標がある。

以下では、今回の編年に用いた指標についてしるす(表1参照)。まずはじめに、特に編年区分に有力に関わった指標について述べ、その後にその他の指標について述べる。

広間の分割 この指標は言い換えれば、間取りにおける「広間型」と「四間取型」の別を示す。全国的に多いと考えられる指標であり、広間型から四間取型への変化が一般的である。この地域では復原の結果、広間型に該当する民家は表側から裏側まで通して広間に復されることが多く、10件を数える。これら該当民家は後の改造で太い柱を挿入し、差鴨居によって建具を入れて広間を区切っている。したがって改造過程から広間を分割するようになるのが指標として後の現象と、この地域でも考えることができる。また、この指標は広間・茶の間境の差鴨居の有無を兼ねている。

市内の広間型の類別として羽生家を挙げることが出来る(図7¹²⁾)。広間は単純な矩形の間取りである。他地域を見れば、このような広間型の他に、納戸が広間に突出する間取り(図8¹³⁾)や、広間後方を区切った間取り(図9¹⁴⁾)の広間型があるようだ。市内では、このような広間型は当地域では確認できなかった。差鴨居によって下屋部分を区切るもの(No.29)はあったが、上屋柱を建てて区切るものはなかった。但し、この指標について不明な家が4件あるが、現状を優先して考え、他の指標による分類を目指した。

土間・広間境の差鴨居 市内で最古の安永5年の建築年代が明らかなNo.24にこの位置の差鴨居が無く、以降の建築年代が明らかな民家で有する。他の地域でもこの位置の差鴨居は無いものから有るものへと変化する。したがって、この位置に差鴨居がない方が古く、有るものは新しいと言える。

また、差鴨居について言えば、広間・座敷境の差鴨居は、調査例ではほぼ全てに入っており、区分ⅠのNo.17のみが当初のものか不明である。広間・茶の間境の差鴨居は、指標「広間の分割」で示したとおりであり、土間・広間境よりも早く入ってくる。

土間独立柱 市内の建築年代が明らかな民家を比べて、独立柱が有るものの方が古く、幕末～明治の民家ではこの柱が無い。全国的に見ても独立柱は民家の古さを示す指標として一般的である。

市内民家で土間独立柱は裏側上屋柱として立つ場合が多い。最も年代の降るものはNo.59であり、天保13年(1842)の建築年代が明らかである。

また、表側上屋柱列でオカマ柱と対応する位置に独立柱が認められるものがある(図1の柱C)。No.17,42,27¹⁵⁾が該当し、いずれも梁を入れることで抜き取っている。これらは特に古い方の部類と推定される。

納戸構(帳台構) 納戸構は全国的に見られる指標である。建築年

表2 つくば市内の領有状況(明治維新時、村数合計相給村含む)

領主名	石高(石)	比率(%)	村数
天領	14,617	20.2	28
旗本	26,404	36.5	62
藩	土浦	14,188	19.6
	谷田部	10,887	15.1
	仙台	3,662	5.1
	石岡	531	0.7
	佐倉	143	0.2
領	(計)	29,411	40.7
寺社領	1,858	2.6	3
計	72,291	100	149

代の明らかな民家には確認できない。納戸構は10軒で確認できた。また、No.34,22では、どちらも2つ痕跡がある。

No.34では納戸構に対応して部屋が分かれているが、間仕切りが当初のものかは不明である(図2)。No.22では現在は一つの納戸になっており、部屋が分かっていたか不明である。したがって、どちらの家でも2つの納戸構が当初のものかは疑問が残る。しかし納戸の分割は他の地域にも見ることができ、一般的には分割の無いものから有るものへと変化している。この地域でも年代が降る民家には納戸が複数有るものも多いため、複数の納戸構は納戸の分割の初期の例と考えられる。

セガイ・化粧垂木 軒の構造は葺き下し、セガイ、化粧垂木に分けられる。さらに表側のみ用いるもの、2方、3方に用いるもの、全方向に用いるもの、セガイと化粧垂木を場所毎に使い分けるもの、セガイ+化粧垂木と2重に用いるものがある。

他の地域でも軒の構造として葺き下しからセガイへと変化するとして、指標に用いられている。市内の例では、No.10で葺き下しの軒構造にセガイ・化粧垂木を加える改造を行っている。No.22では側柱にセガイ腕木を後から取り付けている。

年代が明らかな民家を見比べると、No.24(1776),No.7(1827)がセガイ、No.0(1800頃)は場所毎にセガイと化粧垂木を使い分け、No.20(1866)がセガイ+化粧垂木を2重にしている。

以上を総合すれば、葺き下しが最も古く、続いてセガイ、次に場所毎に使い分け、最後にセガイ+化粧垂木と言える。化粧垂木はNo.30(1865)が年代が明かだが、場所毎に使い分けるNo.0からこれ以前にもあったと考えられる。

格子窓・蔀・三本引き これらは柱間建具装置の指標である。全国的にも広く使われる指標であり、いずれも有る場合は古さを示す。当地域でもいずれも痕跡としてのみ残り、現物は確認できなく、改造されて掃き出しのガラス戸や障子戸が納められている。格子窓はNo.17,27,35,34の4件、三本引きの鴨居敷居はNo.27,24,55の3件確認できた。

この地域で特徴的なのは、蔀が多用され、時代が降ってもよく用いられている。12件確認できたが、No.54では蔀を使っていたことを覚えている方が健在である。したがって、編年指標として古さを示すことは確かだが、この地域での一般性は比較的年代が降るものと考えられる。

表側中間柱 柱の密度や間隔、もしくは省略については、全国的に広く用いられる指標である。また、側柱は窓建具などをを用いる場合や差鴨居を用いない場合には1間毎に密に立つことになる。したがって、側柱は古い方が密に立つ傾向があると言える。また、編年表で座敷柱間柱が◎のものは、この柱に壁や窓の痕跡が残るものである。建物の閉鎖性に関わると言えるが、現在は全てが開口に改造

していること、閉鎖性の高さも古さの指標として全国的に広く用いられるので、中間柱が座敷広間共に省略されるものが新しく、残るものが古いと言える。さらに壁・窓が座敷表側に有るものがさらに古い形式と言える。

鍵座敷 全国的な指標で見れば、座敷の増大と関連する。市内民家該当例で建築年代が明らかな最古のものはNo.7(1827)である。他に幕末明治の民家に見られる。但し年代が降るものでも鍵座敷にならない民家も多いので、編年作業においては絶対指標にはならないが、他の指標と比較すると新しい要素の一つと考えられる。

妻床 市内民家の現状ではトコは殆ど平側を向くが、No.22,29で土間を向くトコを見ることができる。特に呼称による区別は無かったが、ここでは妻床と呼び、平側を向くトコを平床とする。しかし、他にも痕跡として妻床が確認でき、No.13,24,23,55が該当する。建築年代が明らかな民家に絞って見ると、最も古い安永5年(1776)のNo.24が該当するが、以降の他の民家では平床である。妻床の民家もNo.22,29以外のNo.13,23,55では改造により平床にしており、No.24では角屋座敷を増築して平床を設けている。改造過程の観点からは平床よりも古い形式と言えるが、これらの妻床も当初のものか明かかではない。したがって、編年指標として不完全であるが、何らかの時代性を持った特徴と考えられ、他の指標との比較から考察することにして、編年表に含めた。

4. 区分説明

上述の指標による調査民家の編年の結果、大きく見て、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの様式的年代序列、すなわち様式編年が得られる。また、概ね同分類されるものの、細部の特徴について共通の特徴を持つグループが見られるので、区分の中でa、bに分けている。編年による各区分の特徴を次に示す。

区分Ⅰ この区分の民家は10棟ある。特色は、

- i. 表側から裏側まで一続きの広間を持つ広間型民家である。
- ii. 納戸構を持つ。
- iii. 軒の構造がセガイ・化粧垂木を用いず、葺き下しの単純な架構。
- iv. 座敷表側柱間が壁や窓に復原される。
- v. 規模が梁間4間、桁行7間を標準にしている(No.28のみ間口1.5間のナカノマ列が有るため桁行が長い)。

区分Ⅰ-aは、裏側土間独立柱(オカマ柱)に対応して、梁を受ける表側の独立柱を確認できる。区分Ⅰ-b以降には確認できないこと、構造柱の省略は全国的な指標の一つであることから、区分Ⅰの中でもaはbに様式序列において遡ると言える。また、Ⅰ-aの3件はいずれも座敷表側に壁もしくは窓痕跡が残り、古い形式を示す。(区分Ⅲ, No.12にも表側に土間独立柱があるが、当家は土間の拡張を含め、改造が何度も重ねられていると推定される。したがって、独立

図7 元重文羽生家住宅平面図

図8 重文椎名家住宅平面図

図9 重文平井家住宅平面図

柱も土間拡張に関わる後補の柱と考えられるので、区分Ⅰの3例とは異なる。)

区分Ⅱ この区分の民家は9棟ある。特色は、

- i. 広間を前後で区切るようになる。
- ii. 土間・広間境に差鴨居がない。
- iii. 土間独立柱が無いものも出てくる。
- iv. 軒がセガイのものが出てくる。
- v. 妻床が多い。
- vi. 区分Ⅰと比べると規模が大きくなる(表3)。

区分Ⅱの内、aには納戸構があり、区分Ⅰに続く年代序列としてbとは区別できる。b以降には納戸構がない。また、aの納戸構は1件につき2ヶ所確認でき、区分Ⅰとも区別できる。規模についてもaの2件は区分Ⅰと比べると梁間桁行共に大きくなっている(表1)。

また、Ⅱ期以降は広間が分割されるとしたが、広間を分かち差鴨居が当初のものか判断が付かない例があり、Ⅱ-aの2件が該当する(図2)。しかし、少なくとも大黒柱は当初と考えられる。この点については周辺地域の民家と比較しながら後述する。いずれにしても大黒柱の出現、区分Ⅰには無かったセガイがこれ以降見られる点を含め、Ⅱ-a期が区分Ⅰからの流れの画期と位置付けることができる。

区分Ⅲ この区分の民家は9棟ある。特色は、

- i. この区分まで土間独立柱がある。
- ii. 軒はセガイが一般的だが、葺き下しがこの区分まで(No.12,57)、化粧垂木がこの区分から(No.6)見られる。
- iii. 三本引きの建具がこの区分まで(No.55)。
- iv. 鍵座敷がこの区分から(No.7)。
- v. 区分Ⅱと比べるとさらに規模が大きくなる(表3)。

区分Ⅳ この区分の特徴は、

- i. 土間の独立柱がない。
- ii. 軒の構造が多様になり、場所を変えて構法を変えたり、二重に用いるものも現れる。
- iii. まだ、蓐を設ける家がある(No.25)。

iv. 表側柱の省略が進む。

v. 巨大な民家が建設される一方で、区分Ⅲよりも小さい規模の民家も見られる。

vi. 鍵座敷も採用されることが多くなる。

規模について、表3は各区分の規模を示したものである。区分ⅠからⅢにかけて規模が増大する傾向が分かる。しかし、区分Ⅳでは区分Ⅲと比較して、明らかに小さい規模のグループが確認できる。その一方でⅢまでの増大傾向の延長にあるような巨大民家も確認できる。階層性との関わりが推測され、区分すべきであるが、明確に区分できなかった。幕末以降はNo.52,60,48,51などで、当初からカマヤを別棟で設ける。したがって、土間部分が析出していると考えられ、主屋の規模はさほど小さくなくとも上位の階層に属するものもある。

5. 区分の実年代および周辺文化財民家との比較についての考察

前節までで、調査民家の編年区分を行ってきた。ここでは、それぞれの区分についての実年代について触れる。市内民家の内、建築年代が明らかな民家の最古のものはNo.24の安永5年(1776)であり、区分Ⅰ、Ⅱ-aについて実年代の手掛かりが殆どない。そこで、茨城県内の文化財指定民家の内、解体修理調査が行われた民家を用いて比較することで、実年代と特徴について考察する。

表4は前述の茨城県内の文化財民家を市内民家と比較するために作成したものである。建築年代は18世紀中頃以前なので、古い形式についてより詳しく比較するために指標が若干異なるが、これについては比較しながら述べる。

区分Ⅰ

区分Ⅰ-aの特徴の一つである、オカマ柱とそれに対応する表側の独立柱について。文化財民家を見ると、例えば椎名家では土間の独立柱が3本有る(図8)。このうち本稿で扱ったオカマ柱としての土間独立柱にあたる柱は、ヨコザの突出した隅にある柱Aである。他の2本の柱は直接梁を受けて、その上に妻側の桁を受けるので、市

表3 各区分の規模分布

6.5	(梁間・間)													区分Ⅰ 【件数】														6.5	(梁間・間)													区分Ⅱ 【件数】																																																			
6																												6	1																																																																
5.5																												5.5																																																																	
5																												5	2													1													1																																						
4.5	1																											4.5	1																																																																
4	1													1													4																											4	1													1													1												
3.5	1													1													1																											3.5																																							
3														(桁行・間)														3														(桁行・間)																																																			
	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0	12.5	13.0		6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0	12.5	13.0																																																														

6.5	(梁間・間)													区分Ⅲ 【件数】														6.5	(梁間・間)													区分Ⅳ 【件数】																																																																																									
6														1														6	1													2													1													1																																																															
5.5	1																											5.5	2													1																																																																																									
5														1													1													1													5	4													1													2													1													1													1												
4.5														1																											4.5	1													2													1													1													1													1																								
4																											1																											4	2																																																																												
3.5																												(桁行・間)														3.5														1																																																																											
3																												3														(桁行・間)																																																																																									
	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0	12.5	13.0		6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	9.0	9.5	10.0	10.5	11.0	11.5	12.0	12.5	13.0																																																																																																				

表4 茨城県内文化財民家の特徴

名前	指定	形式	規模間数	広間の形式	差鴨居	差鴨居	納戸構	土間独立柱	格子・葎	表側中間柱		座敷	妻床	建築年代	
			(分棟・曲屋は居室部分) 桁行 × 梁間		茶の間／広間	土間／広間		(オカマ柱)		セガイ	・三本引				座敷
椎名家	国重	直屋	7.5 × 5.0	納戸突出	×	×	○	○	×	○××	●	○	平	×	延宝 2年 ,1674, 墨書
中山家	県有	直屋	9.0 × 5.5	無目敷居(図11)	×	×	×	○	○	×○○	○	○	平	×	(延宝 2年 ,1674, 墨書)
太田家	国重	分棟	5.0 × 4.5	納戸突出	×	×	○	△ (分棟型)	×	○×○	○	○	平	×	17世紀後半頃 (推定)
羽生家	国重	直屋	6.5 × 4.0	矩形広間	×	×	○	×	×	○××	×	○	平	○	17世紀後半頃 (推定)
中崎家	国重	分棟	8.0 × 4.5	納戸突出	×	×	×	△ (分棟型)	×	△××	○	○	妻	×	元禄元年 ,1688, 墨書
平井家	国重	直屋	9.5 × 5.0	広間後方間仕切	×	×	×	? (図 9)	○	○×○	○	○	?	×	元禄年間頃 (楳村推定)
山本家	国重	曲屋	10.0 × 5.5	広間後方間仕切	×	△	×	△ (曲屋型)	○	○××	×	○	妻	×	18世紀前半頃 (推定)
飛田家	国重	曲屋	9.0 × 3.5	納戸突出	×	×	×	△ (曲屋型)	×	○×○	○	○	平	×	18世紀前半頃 (推定)
塙家	国重	分棟	7.0 × 4.5	納戸突出	×	×	×	△ (分棟型)	×	○×○	○	○	妻	×	18世紀中頃 (推定)

内民家の独立柱とは区別した。柱Aに対応する位置Cに柱はない。

以上から、文化財民家を直屋形式に絞ると、土間独立柱が表と裏に2本有るものは見当たらない。したがってこの点では、区分Ⅰ-aの形式は文化財民家と比較しても古いと考えられる。

座敷表側が壁や窓に復されることについて、市内では区分Ⅰ-aの3件とbの内2件が該当し、文化財民家を見ると椎名家のみが該当する。椎名家は延宝2年(1674)の建築と考えられ、県内では最も古い遺構の一つである。

間取りについて。区分Ⅰの民家は表側から裏側まで、一続きの矩形の広間を持つ。このような間取りの文化財民家は旧中山家と羽生家が該当する。旧中山家は延宝2年(1674)の建築の可能性があると考えられている。羽生家は17世紀後半頃の建築と推定されている。

ここまでで比較した椎名家、旧中山家、羽生家をつけば市内民家の発展段階に当てはめれば、特に椎名家、羽生家については区分Ⅰ-bに該当すると考えられる。

以上を総合し、文化財民家が17世紀後半を中心に建設されていることを加味すれば、やはり区分Ⅰの民家も建築年代について17世紀後半を中心に考えて妥当であろう。また区分Ⅰ-aについては、形式的には文化財民家や区分Ⅰ-bよりも古い形式の民家と考えられるが、比較的規模が小さいことを考えれば、同時期の階層性を区分したものと考えることもできる。

区分Ⅱ-a

区分Ⅱ-aの特徴は、太い土間独立柱を持ちながら、その付近に表と裏の上屋柱列の中程に大黒柱が現れている。それに伴い広間が分割される可能性を持った民家であり、納戸構が2つ確認できる。さらにセガイ軒という新しい要素と座敷表側に壁もしくは窓に復される古い要素が混じった区分である。この区分と似た特徴を持つ民家として旧中山家が挙げられる(図11¹⁵⁾)。土間独立柱と大黒柱の太さ関係、距離関係など柱構成が酷似している。また、セガイ軒という新しい要素を持ち、座敷表側は壁や窓ではないが、三本引きの建具を納めるという全国的に見れば古い要素を兼ね備えている。

区分Ⅱ-aで特に不明な点であった広間の分割についても、旧中山家は一続きの広間から広間・茶の間分割への発展過程を示唆している。これは、旧中山家では床側で大黒柱からの無目の敷居によって広間を分割するものの、天井側は梁が掛かるのみであり、まだ分割されきっていないという特徴を持つことによる。また、広間にトコが飛び出すが、前述の梁下に管柱を入れることで設けられており、さらに裏側は広間を区切らない。したがって、納戸が突出したり上屋柱と建具で仕切るわけではなく、単純な矩形の広間型と言える。また、他の文化財民家には見られず、つくば市内ではよく見られる葎

- ① 椎名家(霞ヶ浦町)
- ② 中山家(岩井市)
- ③ 太田家(笠間市)
- ④ 羽生家(八郷町)
- ⑤ 中崎家(内原町)
- ⑥ 平井家(新利根町)
- ⑦ 山本家(神栖町)
- ⑧ 飛田家(金砂郷町)
- ⑨ 塙家(岩間町)

図10 茨城県内文化財民家所在

が有る。表中では市内民家に最もよく似た民家と言え、つくば市内民家に当てはめれば区分Ⅱ-aに該当すると言える。

さらに区分Ⅱ-aで見られた二つの納戸構について。旧中山家では納戸構は確認されていないものの、ナンドの入口はウラヒロマに面して二つある。したがって、納戸構の有無については類似性が薄れるものの、二つの入口によって類似性は否定できないと言える。また、旧中山家とⅡ-aは納戸の開口を複数持つことを反映して、奥深い間取りを形成している。

以上から実年代について考えると、上限は旧中山家が延宝2年(1674)建築の可能性があるので、17世紀末期まで遡るかもしれない。しかし、区分Ⅰについて17世紀後半を中心と考えたので、Ⅱ-aの中心はこれ以降と考えられ、18世紀前半として大過ないだろう。

また、No.34に残る伝承は興味深いものがある。これは、当家がこの辺りで初めて軒をセガイにした家であったため、五里四方の人が参観に訪れたという伝承である。裏付けは何もないため信頼性に疑問が残るが、珍しい伝承であり、否定の材料も特にない。いずれにしても当家の階層の高さを窺わせること、当地において画期的な民家であると考えられる区分Ⅱ-aを裏付ける伝承である。

では、下限について。No.58は土間広間境に差鴨居が入るので、区分Ⅲに分類されるが、土間独立柱と大黒柱の柱構成がNo.34, 22、旧中山家とよく似ている。よって区分Ⅱの名残をもった家と言える。また、当家の初代は1740年に生まれ、1788年に没していることが分かっている。したがって、当家の建築年代は建物の特徴と照らし合わせても18世紀中頃と見てよいだろうし、この頃が区分Ⅱ-aの下限と考えられる。

図11 県有文旧中山家住宅平面図

また、この大黒柱と土間独立柱の関係性の問題は、広間の区切り方が明らかになれば、間取りの変遷についてより正確な編年序列を明らかにする指標と成りうる。これは今後の課題とする。

区分Ⅱ-b

区分Ⅱ-bのNo.24は安永5年(1776)の建築年代が明らかである。また、No.29は宝暦3年(1753)に火災に遭っていることが史料に記されており、この火災後に建設されたことが伝承されている。これらの点から見れば、Ⅱ-bは18世紀中頃から19世紀初期にかけて、18世紀後半が中心と考えられる。

区分Ⅲ

区分Ⅲでは、No.11が文政5年(1822)、No.7が文政10年(1827)、No.59が天保13年(1842)の建築年代が明らかである。しかし、この3件は区分Ⅲの中でも規模が大きく、No.7では鍵座敷の間取りが見られる。また、この区分の中で比較的規模の小さいNo.58は、大黒柱とカマ柱の位置関係など軸組構成がⅡ-aとよく似ており、広間の分割についても不明な点が多い。したがって、区分Ⅲは上限が区分Ⅱ-aに近いところまで遡り、下限は天保(1830～44)頃と見られる。

区分Ⅳ

区分Ⅳの上限について、建築年代の明らかなものではNo.0の寛政12年(1800)頃が最も遡るが、No.19,39の2件はともに天明(1781～89)の伝承が残る。但し、この伝承の裏付けは何もない。したがって区分Ⅳの上限は18世紀末期と考えておくのが妥当だろう。

6. 結語

以上、編年結果はこれまで述べてきたとおりであり(図12)、市内民家の17世紀から19世紀まで時代毎に民家の特徴を見出すことができた。これによって、調査の成果として17世紀から19世紀まで、各時代毎の民家の存在を確認できたこと、そして編年分析の結果から、裏付けが出来たと考えられる。

最後に、この結果と県内文化財民家との比較による、つくば市内民家の県内における地域性の位置付けについて、『茨城県の民家』では、①県南及び県西が直屋型地域であること、②平井家など新利根

村の民家と椎名家及び千葉県北部民家の類似性、③旧中山家を「猿島型民家」と位置付け、木柄が太く、建ちが高いという特徴を持ち、この種の民家が猿島地方(図10)に見られること、④帳台構(納戸構)が筑波山周辺地域に見られること、⑤分棟型民家が県央に見られ、本県の近世民家の原型と位置付けている。

本稿の成果としては、椎名家や羽生家を市内民家の発展段階に当てはめると区分Ⅰ-bに分類されること。これに『茨城県の民家』の指摘である①、④、⑤を加味すれば、区分Ⅰ-aが椎名家や羽生家よりも古い形式であり、直屋型として本県の近世民家の原型に最も近いこと。区分Ⅰ-bは県央に位置する羽生家や県南地域の椎名家と同発展段階で目立った差異がないことで、比較的広い地域性を示すこと。区分Ⅱ-aでは③の猿島型民家に酷似し、②の平井家などの県南地域と市内民家は系統が異なること。以上を指摘できる。

謝辞 調査の機会を与えてくださった、つくば市教育委員会、民家所有者の方々、調査・復原作業について多大なご教示を頂いた田中文男氏、重文平井家住宅に関する資料をご提供頂いた野尻孝明氏、また、調査に御協力いただいた数多くの方々に感謝申し上げます。

注および参考文献

- 1) 『つくばの民家 ーつくば市古民家調査報告書ー』(つくば市教育委員会、国際科学振興財団,2002.3)
- 2) 一色文彦『茨城県の民家』(茨城県教育委員会,1976.3)
- 3) 東京都立大学石井研究室『近世町家の実態調査(筑波の場合) 都市集住様式の歴史的研究ーそのⅣー』(住宅建築研究所,1979)
- 4) 『生きつづける民家 旧横田家住宅移築再生の記録』(桜村・住宅都市整備公団,1985)、本稿では調査No.0とした。
- 5) No.19,34,42,47の4棟。
- 6) 『茨城方言民俗語辞典』(編・赤城毅彦、東京堂出版,1991.9) pp.126-127
- 7) 『日本民家語彙集解』(編・日本建築学会民家語彙集録部会、日外アソシエーツ,1985.10) pp.116
- 8) 日本建築学会民家小委員会編『民家調査基準Ⅰ 復元的調査および編年』(日本建築学会,1963.3) pp.299
- 9) 大岡敏昭『藩制と民家』(相模書房,1990)
- 10) 齋藤茂『1-1 近世つくばの村と町』註1前掲『つくばの民家』
- 11) 註10前掲『近世つくばの村と町』pp.16,表1-1-5(木村健校訂『旧高田領取調帳』(近藤出版社,1969-79)より作成。)
- 12) 『重要文化財羽生家住宅修理工事報告書』(重要文化財羽生家住宅修理委員会,1979.3)より作成。
- 13) 『重要文化財椎名家住宅修理工事報告書』(重要文化財椎名家住宅修理委員会,1971.1)より作成。
- 14) 『重要文化財平井家住宅資料』(文化財建造物保存技術協会)より作成。
- 15) 調査No.27のみ推定。
- 16) 『茨城県指定有形文化財旧中山家住宅修理工事報告書』(古河市教育委員会,1975.3)より作成。

図12 区分推定年代

(2003年3月10日原稿受理、2003年5月26日採用決定)